

明清期中国の史論における公正（報告要旨）

林 文孝

0 はじめに

趣意書に言う意味での「公正」を中国において表現する言葉として、「公」を挙げるができる。溝口 [1995] は、日本の「公」概念との差異に着目し、思想史的観点から中国的「公」概念の特質を描き出した。それによれば、中国の「公」には「天、自然、条理、多数、均、つながりの共同、利他、調和など」(p.84) のアスペクトが内包され、本報告が扱う明清期（変化の画期は明末）には、「民の私有欲が充足され、それらが相互に調和が図られるような私の調和態としての公」(p.56) が主張されたという。

明清期の社会秩序に関しても、いくつかの成果において「公」が鍵概念とされている。寺田 [1997] は、清代の裁きの構図を「公 私」型として提示するし、岸本 [1999] においては、民変に代表される「衆心が期せずして同一方向に流れるその動き」(p.12) が「公」と表現されたと指摘する。なお、当該時期の法秩序の問題についてのレビューとしては三木 [1998] がある。

本報告は、以上のような成果を念頭に置きつつも、若干異なる方向から材料を提示して中国の「公正」意識にアプローチしたい。具体的には、明清期の思想家、とりわけ王夫之（1619-92）が歴史的対象に対して下した「公正」さの判断に注目し、その中での「公」概念ならびにそれをめぐる概念系の運用のされ方を考察する。その上で、こうした個別の思想家についての知見が、「中国における公正」を論じかつ比較対象とするために持ちうる意義についても論及したい。なお、黄宗羲（1610-95）の体制構想における「公議」を、如上の諸成果を摂取した上で分析したのものとしては、小島 [1998] がある。

1 史論において「公正」を論ずること

岸本 [1993] は、趣意書にも言及される明代民変のスタイルを論じた際、「紀伝体的政治空間」(p.5) という用語を提起した。ここから示唆されるのは、中国における、歴史に対する判断基準と現実に生きて働く秩序意識との密接な関係である。中国の歴史意識に見られる強い現実的関心は、内藤 [1949 1969] が、清初の経世思想家の議論について「史論即時勢論であった」(p.310) と指摘したのをはじめ、増淵 [1983] 岸本 [1996] でも論じられる。とすれば、史論は、中国社会における「公正」意識を論じるための手がかりとなりうるのではないか。

もちろん、史論家は儒教の教養を備えた知識人であって、民衆とは「公正」意識そのものが異なることが考えられる。しかし、そうした差異があるとしても、ある種の同型性のもとでの振幅として解釈することはできるかもしれない。

2 王夫之と李贄の「是非」

王夫之の史論の特徴については、内藤 [1949 1969]: pp.306-310 をはじめ、堀 [1986] ジェルネ [1991] 齊藤 [1999] などを参照のこと。本報告で最初に取り上げるのは、王夫之が自己の史論の原則を述べた『読通鑑論』叙論であり、そこでは「大公至正の是非」を論じないこと、

李贄（1527-1602）に代表される邪説を排斥することを論じている。

前者は、民衆が一致しうる是非判断を史論にとって無意味とするものである。関連して、別の議論では、「天意は民意に表される」との経書の文言を肯定すると同時に、「流俗」化した民衆の直接行動への不信感をも表明している。いわば、単なる衆心の一致としての「公」とは距離を置こうとする王夫之において、「公」はどのように価値づけられ、どのように実現されるものであったのか。このとき、斉藤〔1999〕が論じた「勢」「理」「天」といった他の鍵概念との関連も問われるであろう。

後者に関しては、李・王両者に多くの思想的共通性が認められる中で、王夫之による批判のポイントがどこにあったのかを佐藤〔1987〕が分析している。本報告では、李贄『蔵書』世紀列伝総目論における「是非」の相対性の議論などを手がかりに、李・王の「公正」意識の異と同を再確認したい。同のとりわけ大きなポイントは、「民生の安定」に帰着するであろう。

3 王夫之の歴代経済政策論

民生の安定が「公正」の主たる内容であるとしても、それだけではほとんど無内容である。そこで、王夫之という一個人の「公正」判断がいかなる論理に基づいているかを事例研究してみることにする。材料は、中国歴代の経済政策をめぐる論評である（『読通鑑論』における経済政策論は、後藤・山井編訳〔1971〕: pp. 255-300 に抄訳されている）。

参考文献

- 岸本美緒 1993 「明末清初江南の地方民衆と権力者たち」『歴史学研究』651。
1996 「風俗と時代観」『古代文化』48。
1999 『明清交替と江南社会』東京大学出版会。
- 小島毅 1998 「中国近世の公議」『思想』889。
- 後藤基巳・山井湧編訳 1971 『中国古典文学大系 57 明末清初政治評論集』平凡社（李贄『蔵書』と王夫之『読通鑑論』の抄訳を収める）。
- 斉藤禎 1999 「王夫之の歴史観について その宋代新法改革論をめぐって」『アジアの歴史と文化』3。
- 佐藤鍊太郎 1987 「王夫之の李贄批判について」『中国 社会と文化』2。
- ジャック・ジェルネ（明神洋訳） 1991 「歴史の読み方 王夫之の思想の一」『東方学』82。
- 寺田浩明 1997 「権利と冤抑 清代聴訟世界の全体像」『法学』61-5。
- 内藤虎次郎 1949 1969 『支那史学史』（『内藤湖南全集 第11巻』所収）筑摩書房。
- 堀豊 1986 「王夫之の史論について 『読通鑑論』『宋論』を中心に」『集刊東洋学』56。
- 増淵龍夫 1983 『歴史家の同時代史的考察について』岩波書店。
- 三木聡 1998 「明清時代の地域社会と法秩序」『歴史評論』580。
- 溝口雄三 1995 『中国の公と私』研文出版。